定年退官に際して

甲　斐　正　人（植物園）

とき，恰も昭和という長い時代が幕を閉じ，平成という新しい時代を迎えた今年の１月，戦争と平和，苦難と繁栄の激動の時代と共に生きてきた私ですが，この昭和という年代に終止符が打れて，まもなく３月末をもって定年退職という，また一つの出来事が控えています。実感としてはまだピンときませんが，その日が確実に迫っています。一方では退官に対する対応があり，片方では現実の業務の処理の仕方があり，複雑な心境の今日此の頃です。

長かった昭和の時代も一歩その枠から抜け出してみると，色々な出来事がより鮮明に見えてくるような錯覚を覚えるのは，私一人でしょうか。私が東大という枠の中で仕事をするようになって，かれこれ33年余，その中で最も長期に亘って，お世話になったのは植物園であります。植物園には1962年以来，約27年余在職しましたが，当時はまだ戦後の復興の遅れが目立ち，随所にその面影を見ることができました。特に温室の復興が殊の外，遅れていた感じがしました。しかし，先輩諸氏の努力のお陰で今は全く，その面影を見ることはできません。こうした推移のなかで着実に時代は前進しています。今後ますます多様化する，自然環境の悪化，それに伴う植物社会，これらに対応するためには，日本の植物園の基盤はあまりにも弱いものがあります。野性植物あるいは遺伝子資源の確保が叫ばれて久しいが，保存するにもその施設が貧弱である。当面，専門的には「プロパゲーション・エリア（増殖保存区画）」という施設など急務を用するものがあるが，財政難に加えて人材難が慢性的な日本の植物園が，これからの問題点をいかに克服していくかが，今後の課題ではないでしょうか。特に人材については若手技術者が能力を十分発揮できるような環境整備を中心に育成することが必要でしょう。幸い資源植物の保全あるいは保存については，国際的な協力体制が確立されつつあり，着々進んでいるのが現状で，今後は受け入れ枠の拡大が望まれる所以であろうかと思います。

最後に長い間，お世話になりました。植物園の方々をはじめ理学部の皆様方に対して感謝申し上げると共に，植物園の益々のご発展を祈念しつつ，お礼の言葉とさせて頂きます。

1989年１月20日　記